

女々しい人

yukikago

□

男、というのは性格の一つである。男らしいと言われれば、それが性別ではなく性格の事を指すのが容易に分かるだろう。それが例え女でも、男らしいと言われるのならそれは性格の事を指しているのである。女なのに男、というのはなんとも紛らわしい。

逆もある。それは女々しいと言われている。なよなよとしていて、優柔不断で、女に生まれた方が良かったのではとってしまうような、女っぽい男の事である。こちらは女に使われるイメージがない。

断っておくが、私は別に男女差別をしたいわけじゃない。私がなんたるかを理解頂ければ、それが男女差別とは違うものだと言言出来るだろう。仮に理解出来ずとも、まあ、こんな人間が世の中にはいるという事を、知ってくればそれでいいと思う。少数派にも優しい社会を！なんて大袈裟な事は言わない。ただ、私は私の道を征くし、あなたはあなたの道を征くのだから、お互いに利害の不一致がない限りは争ったり、罵ったりする必要はないという事である。あなたが不利益を被らない限りは、私の好きにさせて欲しいし、逆にあなたも私から見て不利益がない限りは何も言うつもりはない。あなたがそういう、立派な紳士淑女である事を私は知っているから、一応の確認としてこのような事を断っておく次第である。

□

その日の天候はほどほどの霧であった。

私の街は山岳でもないのによく水気の多い霧が起こる。これが晴れの日に起こると、光の角度によっては小さな虹が見えるのでとても綺麗だ。もっとも、それは霧が薄い時の話で、本当に濃くなると数メートル先も見えない程になる。そうなる太陽光は地面に届かず、虹は見えない。視界は不明瞭でただただ危ないばかりだ。

私は、かっぱを着て霧の中を歩いた。今日は数十メートル先まで見えるので、酷い霧ではなかったが、水分が顔や手足について、少しばかり不愉快であった。

道行く人は少ない。霧の日は雨の日とほとんど同じようなもので、外出しようという気力が削がれてしまうのである。わざわざ雨がっぱを引っ張り出さないと道を歩けないというのが、面倒くさいわけだ。私も用事がなければ家を出るつもりはなかった。

私は大通りをひたすらまっすぐに歩いた。クリーニング屋を通り過ぎ、子供で賑わう学習塾を通り過ぎ、酒屋から急激に始まる坂を登った。午後五時を告げる音楽がどこからかぼんやりと聞こえてくる。そうして私は、目的地についた。

□

そこは小さな教会である。建物の高さは普通の二階建て一軒家と同じくらいで、幅もやはり似たようなものである。

壁はよく磨かれていて実に白い。この地域の家ありがちなカビやコケのない、手入れの行き届いたものだ。

私は扉を開けて、中に入った。

教会は静かで、人の気配はない。もしかすると神の気配くらいはあるのではないかとときよるときよと観察してみたが、そのようなものもない。

教会と言うとステンドグラスがあって、木で出来た長椅子がありそうなイメージだが、ここにはそういうものはない。ステンドグラスはそもそもないし、椅子と言えばパイプ椅子である。なんだかとっても俗世間に飲まれた教会だ。でもその分、入りやすさがある。

□

私は手近な、濡れても良さそうなところに雨がっぱを放り投げた。短く切った髪も濡れていて、軽く頭を振って水気をとった。

教壇に向かってなんとなく一礼した後、最前列のパイプ椅子に腰掛けて本を読んだ。

「わがはいはねこである。なまえはまだない」

私は書生なる猫を投げ捨てる獰猛な人種に憤慨していると、隣に気配を感じた。

「アオノくん、今日は何を読んでいるの？」

その人は、私の隣に座りながら、優しげに話しかけて来た。

「今晚は、綾さん。吾輩は猫である、という本を読んでいます」

「夏目漱石ね。懐かしい、私も昔読んだ覚えがあるよ」

「ぼくは読み始めたところです」

「うんうん、楽しめるといいね」

この人は鳥居綾さんである。この教会のシスターで、いつもなら修道女の服を着ている。今は、長袖の白いシャツに黒いジーンズという軽い格好をしている。髪は結んで左肩から前に出していた。この髪型が子供のころからの癖らしく、何も考えずに髪をいじるとそうなるらしい。

「アオノくんはいつからここに？」

「ついさっき来たばかりです」

「あら、なら良かった。もう少ししたら外に出ようかと思ってたから」

「何か用事があるんですか？ なら、ぼくはおいとましますが……」

「うん、何も無いの。ただ散歩がしたかっただけだから。アオノくんがここにいるなら、私もここにいるよ」

「それでは……お言葉に甘えさせていただきますね」

「うんうん、甘えて頂戴」

綾さんは楽しそうに微笑んだ。

□

綾さんは雑誌を、ぼくは本を読み続けた。時々雑談が入る、本を読む、雑談をする、本を読む。これが繰り返されるのが、私と綾さんだけが教会にいる時のリズムだ。

私は、最近の家庭の事について話した。

「ぼくは家政婦ではないのですがね。母さんの作る料理は絶品なのですが、後片付けは全部ぼくの役目です。掃除も家中やらないといけませんし、姉達はあまり手伝ってはくれません」

「アオノくんは良い子ねえ。なんだかんだ言っても、ちゃんと家事をするんでしょ」
そういうと綾さんはぽんぽんと私の頭を撫でてくれる。そうやって頭を撫でられると、日頃の家事の疲れが、どろどろと溶けて流れ落ちるような気がした。なんとなくまたやる気が出てくる。ほんわかとした平和な気持ちになる。胸の内がすうっと晴れ渡って、草原を吹く風のような、さわやかさが入ってくる。

「そんな事ないですよ」
私は謙遜した。でも内心、褒められた事はとても嬉しい。
その日はそれで解散となった。私はまた明日もこようかな、とぼんやり考えた。

□
私の家の一階の一部は喫茶店になっていて、私はそこから家に入った。

「アオノちゃん、おかえりなさい」
「こんにちはー」
三姉と、その彼氏が、私を迎えた。
三姉はここで喫茶店の店員をやっている。そしてこの彼氏は、デートと称してほぼ毎日ここに来る。そうしてまったりと三姉と会話をしている事が多い。
私は無口な方なので、こんなに長く一緒にいて、会話が途切れない姉カップルはすごいものだなと思う。

「姉さん、何か食べるもの、ある？」
「あら、アオノちゃん、珍しいですね。ちょっと待ってて下さいね、何かあったはずですよ」
姉さんは奥に引っ込んでしまった。
「ねーねー、この問題分かる？」
彼氏は親しげに聞いてくる。この彼氏はとある大学に在籍する人間で、妙に子供っぽい性格をしている。机にはやりかけの問題があり、彼は問題集のとある項目をペンで指して、私に見せている。

「さあ」
「ほがらかさんもそーだけど、教えてくれないね」
「アオノちゃん、ハンバーグがあるのですが、これでいいですか？」
「ええ」
「あ、ぼくもぼくも！」
「もちろん君の分もちゃんとありますよ。二人とも待っていて下さいね」
姉さんはそうして、じゅうじゅうとハンバーグを焼き始めた。

▷
他人からどう見えるか、というのは私にはよく分からない。次姉に言わせると「無口でクール」らしい。
私は洗面台の鏡で顔をみつめてみた。ただの平凡な人間の顔である。鏡を見つめてにやにやする

ようなナルシストではないので、顔は無表情だった。

なんの面白みもないや、と私は顔をそらした。ふと、鏡に映るものに違和感を感じて再度鏡を見たが、そこには何の違和感もない。錯覚か、まあよくある事だろう、と思って、今度こそ鏡を見るのをやめた。

□

今日も教会へ行った。相変わらず人気はなく、しんとしている。多分奥にある小部屋には綾さんがいて、事務や雑事をやっている。なんとなくの暗黙のルールとして、私は特に用事がない場合は、小部屋に近づかないようにしている。

私は椅子に座り、ぼんやりと天井を見つめた。パイプ椅子を斜めにしてぎしぎしならした。「吾輩は猫である」は持ってはいるが、なんとなく読む気は起きない。

私は教会に通っているが、無宗教だ。カトリックとプロテスタントの区別もつかないようなレベルの奴なのだ。それがこうやって、教会が開けっぴろげになっているのをいい事に、休憩所替わりにしているのである。あともう一つ理由はあるが、それはまだここにはいない。

あくびを一つ。二つ。ああ。退屈だ一。

□

長い人生の間に、一つや二つくらいの致命的な矛盾を持つ事は、誰にでもある。例えば、かつおぶしは食べられるけどかつおの刺身は食べられないとか。例えば、他人を突き放すけど本当はその人の事が好きで好きで仕方ない困ったさんとか。例えば、お嫁さんがいるのだけど、他の人を好いてしまったとか。

.....あれ、なんか矛盾とは関係ない事も混じってるような気がする。これもまた矛盾なのか。

まあ、うん。

矛盾なんだ。あなたも一つくらい持ってると思う。でも私のはちょっと変な矛盾で、よその人の理解が得られない。理解されないのが分かってるから、人には極力言わない。知ってるのは姉や母や、綾さんくらいかな。

綾さん。綾さんか.....。

□

うわっ。

私は体をびくっと震わせながら目を覚ました。あたりを急いで見回して、ここがどこなのかを把握した。居眠りすると、どうしてもどこに居るのかが分からなくなってしまう。だからこうやって慌てふためくわけだ。落ち着け私、ここは教会、私は私。座っているのはパイプ椅子。

.....夢うつつから現実に戻ってきた。時計から察するに、眠っていたのはほんの数分だったようだ。

教会に変化はない。神が降臨した形跡もない。降りてきたからといって何か叶えたい願いはない。そもそも神ってそういうものか.....？ なんか違うような気がする。

最近はどこもかしこも監視監視監視で、この教会の天井四隅にも五感センサーがついている。こいつらが、今この場にある現実ってやつを、克明に観察し記録している。必要となれば犯罪の証拠として、必要となればネットを泳ぐ怪魚の餌になる。機械とはほとんど無縁の教会において、このセンサーはとても異質な存在に見える。天然自然で構成されているかのように見える物に、機械がくっつくというのはそういう事である。お互い両極端過ぎて、とにかく目立つのだ。私は正気に戻った頭でぼんやりとセンサーを見つめていた。センサーはそしらぬ顔で教会と一緒に私を記録している。怪魚どもは私がやっているような、センサーをぽかんとした顔で見つめる行為の意味があまり理解出来ないのだという。ちょっと外に出て、ぽかんとしている側に回れば簡単に理解出来る事をしないのが怪魚のやり方だ。物理的に移動しない、あるいは物を持たずに生活する、これらが賢い選択なのは確かだ。しかし、賢くなった結果、ちょっと動くだけで簡単に解る事を欠損してしまうというの、どうもおかしな話だ。それは本当に賢いのだろうか……賢くなった結果、愚かしくなった点もあるのではないか……そんな事を考えるわけである。

□

教壇の方にある小さな扉が開いて、綾さんが出てきた。今日は修道服である。修道服の綾さんは、あの長い髪を完全に隠している。左肩で結んで下げている綾さんと、髪を完全に見せない綾さんは、何だか別人のような印象を持つ。修道服だから神々しいと言いたいわけではない。髪の有無は雰囲気を変えるとこの事だ。

綾さんはいつもと違う雰囲気で静々と教壇に立つと、一言こう言った。

「祈りましょう」

私は沈黙した。祈れば叶うものとは到底思えぬ。しかし祈れば天は我に味方するやもしれぬ。酷く邪心が混じっていると思いつつも、私は神に祈った。神にその邪心を見抜かれても、神ならきっと許して下さるに違いない。ただ、罪を悔い改める事は、たぶんしない。そういう性質なのだから仕方ないだろう。求めよと聖書は言うけれど、それが罪だったら、悔い改めつつ求めなければならぬだろうか。やけに難しい。

一通り祈りの儀式が終わると、綾さんはいつもの綾さんに戻った。

「今日もアオノくんだけね」

「いつも通りですね」

「一人でもお祈りはするけど、出来れば一緒にする相手がいるとなお良いわ。いつも来てくれてありがとうね」

「ぼくは暇ですから……綾さんとお話もしたいから来るんです」

まあ、と綾さんは優しい笑顔を向けてくる。私は少し恥ずかしくなって、頬に手をあてた。

□

読解力のあるあなたは、私の一人称が「私」と「ぼく」である事に気づいたかと思う。私は、簡単に言うと、自分を男であると思っている。だから口は「ぼく」を使っている。しかしハードウェアとしての私は、女である。故に心の中では「私」を使っている。心と体が一致していない

のだ。

現代において、性を入れ替えが容易であった。人間は魂をそのまま別の、人間に似せたロボットに移せるようになったのである。だから私も、一度はハードウェア的に男になった事がある。ところがこれが到底受け入れられない。股間の構造の違いだけでは語れないものがある。手足の一挙動から、感覚まで、何もかもが受け入れられない。ハードウェアの故障かもしれぬと別の機体を使ってみても、やはり違和感は拭えないのである。私は、心は男である。しかし体は女でなければならない、という矛盾を持っているという事が、分かったのである。

矛盾に気づいた時にはいささが驚いた。単純にハードウェアを入れ替えれば万事解決だと思っていた私が甘かったのだ。しかし、まあ、そういう人間なのだとして理解出来れば別段どうという事はないのである。ただ少しばかり世間のなんとやらが面倒なので、私はそういう体質を隠している。私は、心と体の不一致をあからさまに気持ち悪がる人間は嫌いだが、不一致を理解した気になって肯定してくる人間もまた嫌いだ。後者は特に嫌いである。ある意味では味方とも言えるのだが、そういう無理解の肯定は無理解の否定よりタチが悪いのだ。そして世の中は、残念な事に、無理解の肯定派が多数を占めるのであった。でもこれは仕方ない。自分も同じ境遇に立てなければ、人間はその心情を思い描く事が出来ない生物なのだから。

□

綾さんはそのような私の心情の中で、どちらにも分類し難い人であった。打ち明けた時の返しは未だに忘れられない。

「あら、そうなんだ。アオノちゃんは男の子なのね。じゃあ、今度からアオノくんって呼んだ方がいい？」

と、このような調子であった。以来私はくん呼びされるようになった。しかしそれ以外何も変わらない。接し方も、カミングアウト以前と変わらないのだ。そんな人は今まで見た事がなかった。大抵の人は……身内でさえも……少し距離をおくような、様子を伺っているような素振りを見せるのだが、綾さんにはそれがなかった。

その綾さんの態度に私がどれほど感激した事か。その感激に突き動かされ、私は教会にちょくちょく通うようになったのである。

□

家に帰ると、長姉と遠横がお茶をしていた。

長姉は黒髪の美人である。堅物で、私の心身の不一致について苦言を呈するのが長姉の特徴である。妹を悪く言いたいわけではない。ただ、姉は「身内に体裁を取り繕う気などない」という心意気の現れからそんな事を発するのだ。口下手でもあるし、正直でもある。良い姉だと私は思っている。

遠横は長姉の友達である。長姉と違い、遠横は体育会系の女である。そう言う爽やかそうな見た目を連想するかもしれないが、その顔は髪の毛に隠れて完全に見えなくなっており、素顔は一度も見た事がなかった。顔に致命的な傷がある、ブサイクを隠している、髪を切るのが面倒、そ

もそも髪の方が本体、という噂は良く出ていたが、当人はそんな言説もどこ吹く風という調子であった。

「また教会に行ってきたのね」

長姉は気だるそうに聞いてきた。

「ええ」

「やっぱり不潔よ、そういうのって」

長姉は何かにつけて私の教会通いを否定する癖があった。この「不潔」という言葉も何度も聞いてきた。あまりにしつこい為に、最近ではお小言を受け流すだけの能力が備わってしまった。

「姉さん、お茶を頂いても」

「どうぞ」

長姉はぶっきらぼうにティーカップを取り出し、テーブルの中央にあるポットから紅茶を注いだ。ほんわかとした香りが漂ってくる。今日はレモンティーらしい。

……今日の遠横はやけに静かだ。いつもは奇妙なくらいおしゃべりのはずだが、今は挨拶すらしない。つるつると紅茶を飲みながら、私に視線を向けている、ような気がする。

「なんでいつもそういう不潔な事をするのかしらねえ」

「姉さんは僻み妬みが過ぎるのでは。恋人や想い人がいないからそんな事を言う」

「そういうのじゃありませんよ。そりゃ、全くないってわけでもないけどね。アカネとおでこはまだいいとして、アオノのそれはみんなが不幸になるじゃないの」

「私一人が我慢してればいい」

「相変わらずクールぶっちゃって」

「人の恋路を邪魔する必要はないだろ」

と、遠横。

「かいりもそんな事言うのね」

「そりゃあそーだろ。お前が気にしすぎなんだよ」

「そうかしらね。私には理解し難いわ」

▷

長姉は何かにつけて次姉と私の交際関係や志向に文句をつけてきた。それは長姉の心配から来るものなのだというのは十分に承知している。あとこれは勘だが、長姉自身が私や次姉のようになる事を恐れているのではないだろうかと思う。

そもそも私達は主上さん家の四姉妹を名乗っているが、大元を辿るとその起源は長姉に由来する。長姉の人格をコピーし、それらを新しい空の体に入れたのが現在の我々である。長姉を含め、母の腹から産まれた子はこれまで一人もいない。私達は私達の人格のコピーを妹と呼び、今やその数は一人が把握出来る範囲を大幅に超えているはずである。

今時の人間の大半は誰かのコピーとして生まれ、体を持たずにネットを泳ぐ怪魚……私はそうよんでいる……になるか、天然自然の人間よりも高性能な機械の体を得るかの二択を持っている。

そしてどちらも行き来が可能であった。

長姉にも元となる人格があるはずだが、今となってはそれもどうでもいい事である。長姉から見れば、長姉のコピーたる我々が、同性愛的な志向を持って暮らしている事が我慢ならないのではないかと思う。健全な一対は男女でなければならぬと固く信じているに違いない。次姉は間違いなく長姉に反逆する側であった。しかし、私は男だ。男が女を好きになって何が悪いか。長姉はそこら辺がよく理解出来ていないように見える。あるいは、理解する気もないのかもしれない。何にせよお小言スルースキルの向上により、長姉の信念は私の心には届かないのである。

□

今日の霧は肌寒かった。霧自体は雨がっぱを必要とする程ではなかったが、その分冷えこみが激しかった。もうそろそろ初夏も終わり、真夏に向かおうという季節だというのに。寒暖差が大きいせいか、母は体力を持っていかれた拳句に風邪を引いてしまった。長姉と一緒に看病する合間に、私は教会に行く事にした。

長姉に教会に行くと言えと、むにゃむにゃと何か言った後、「母さんは任せて」で締めくくった。私はありがたく家を抜け出したのである。

教会につくと、軽く二の腕をさすって暖をとった。あまりにも寒い。軽く震える程の寒さだなんて、冬の始まりみたいだ。

教会には綾さんの旦那さんがいて、あれこれと作業をしていた。

「おや、アオノちゃん、いらっしゃい。済まないがちょっと手伝ってくれないかな。これ、一人だとやりにくくて」

「ええ」

綾さんの旦那さんは温厚な人だ。旦那さん自身は教会に縁のない人だが、たまにこうやって作業を手伝ったりしている。私もそういう作業はよく頼まれるので、何度か顔を合わせたり、会話したりしている。

「綾さんはどうしたんですか？」

「葬式だってさ。終わったらここで親族の方が休憩するんだって」

「そうですか……」

……。

この時代に、死というものは珍しい。何せ体だけはいくらでも換えがきくのだ。病弱な体、寿命まじかの体を新しく若々しい体に変えて生き延びようとしするのは、個人が、死というものを実行しようと思った時だ。あるいは、そうせざるを得ない特別な事情があった時か。

いや。体どころか、精神すらも換えがきく。コピーを作っていれば、私という個人が一人くらい死んだって、どうという事はないんだ。今この場で胸を割いて、原動機を抉り出したとしても、コピーがネットのどこかにいれば、私は死んだとは言えないのだ。

死んだ人は何を考えて死を選択したというのだろうか。死を体験する為にわざと物理的な体だけ死んだのだろうか？ ……それだって、最近の精度のいいゲームをやれば、簡単に解る事だというのに。

「人が死ぬのが不思議かい？」

旦那さんは私の心を見透かしてみせた。

「僕も何故死ぬのかは分からない。でも、たぶん、その人の中で何か納得がいったから、死ぬんだらうね」

納得……分からない。少なくとも私は何も納得出来ない。つまり、私はまだ死なない、という事なんだろう。私にはそれくらいしか分からない。それ以上は分かりたくもない。

「納得がいくことに、納得出来ません」

「僕もそう思うよ」

そうして、二人で黙々と作業を行った。机を教会の中央に置いたり、パイプ椅子を移動させたり、人数分のお弁当を用意したり、花を飾ったり。

「こんなものでしょうか」

「うん、これで十分だよ。ごめんね、わざわざ来てもらったのに準備させちゃって」

「いえ、いつもの事なので……今日はこれで帰ります」

「今度お礼をするよ」

私は教会を出た。

帰り道で死についてぐるぐる考えていた。何だか哲学めいた事で頭の中が満たされたが、結局何の結論も出ない。哲学めいた抽象的な話になった時点で、もう答えは出ないようなものだ。抽象的なものを具象化する事は容易ではない。と思う。

そんなどうしようもない事よりも、綾さんに会えなかった事の方が、私には残念でならなかった。他人の死より綾さんに会う事の方が、私にとっては重要なのだ。

□

しばらくして母の体調もすっかり良くなった。母は開口一番に「旅行に行く」と言い出した。母の趣味は旅行であった。いつも何の兆候もなく突然家を空けるので、私達は慣れっこであった。

「今度はどこに行くんです？」

「姉貴のところに行こうと思ってる。姉貴ん家の子供の顔を見に行くのさ」

それって天然自然の人間ですか。とまでは聞かなかった。

ロボットと人間を分かつものはもはやない。外見から判断する事は不可能で、確かめるには肉を切ってみるしかない。血が出れば人間で、繊維質の鉄のようなものが出てくればロボットである。私は鉄の方である。

人間だろうと、ロボットだろうと、人権的には同じものが与えられ、平等とされている。ロボットが子宮から子を産む事すら可能な程、ハードウェアは進歩している。しかし人権がある事と世間の常識は別である。「あなたは天然自然から産まれた人間ですか、それともロボットですか」と聞くのはタブーなのだ。日常生活ではまず聞いてはいけない。聞くと人によっては要らぬ手間が発生してしまうのだ。よっぽどロボットである事が必須な場面でない限りは、聞かない方がいい。

「四国に住んでる桜子さんですか」

「そーそー。ま、一週間くらいしたら戻ってくるよ。キキにもそう伝えておいておくれ」

「ええ」

「じゃ、よろしくー」

そういうと、母は手ぶらで家を出ていった。心持ちも手軽そうである。

□

桜子さんは母の上のお姉さんで、性格はのほほんとしている。私の三姉もかなりのんびりしているが、それ以上にマイペースである。母の親類はどれもこれも不思議な人達で、色んな所に住んでいるものだから会う機会というものがほとんどない。だから、桜子さんについてはマイペース以上の印象がなかった。

私は今日も教会へ行った。そして母が旅に出た事を綾さんに話した。

「月下のお姉さんねえ。何度もお会いした事があるけど、あれ程のんびりしてる人は他にいないわね。ああいう性格、私は好きよ」

末尾に少しばかりどきりとさせられた。

「月下のお姉さん達ね.....懐かしい。よく柚子ちゃんとはいたずらして遊びまわったものよ」

柚子さんとは母の下の姉である。

「その話はよく聞きました。ねずみを使ったとか、遠横のお母さんが大活躍したとか」

「そうそう、よくそんな事してたよ。よこよこにもたまには会わないといけないな」

母と綾さんは同じ高校の出身で、その縁は今日まで続いている。母と綾さん、それに母の下のお姉さんと遠横のお母さんを中心に、校内を恐怖と笑いと不気味のどん底に突き落としたという。犯人不明の逸話の数々は、この街中に住む他の同窓生の脳髓に今だに深く刻まれている。いたずらと魔道の探求が目的だった、と母は豪語していたが、綾さん曰く「いたずらがバレるといつもおばさんに泣くまで叱られてた」との事。

「おばさん.....私の祖母ですね」

「そうそう、あの人も不思議な人でねえ。たまに連絡は来るけど、大抵一つの場所に留まった試しがないわ」

「母と同じですね、留まるということをしなない.....」

.....それを考えると、なんだか母に似ない息子であるような気がした。私はどちらかというところ、この街を離れるのは好きではないからだ。これが次姉なんかになると、遠い星にわざわざ移住したというし、次姉の恋人に到っては宇宙を駆け巡っているという。地球の、こんな住宅しかない田舎を好き好むのはなんでだろう。もっと、自由にしていってもいいはずなのに。

□

人間がネットで怪魚になったり、現実世界で鋼鉄の肉体を手にいれたりしている間に、人類の活動範囲は大幅に拡大していた。月に住む、火星に住む、木星に住む、土星の輪っかに住む.....そんな事が簡単に出来るようになった。次姉が最も良い例である。次姉は木星住みだ。

そのような広大な世界になっても、人間の思想というものはさして代わり映えがない。男女の対こそが健全である、それ以外は蛇道である、という考えは、単細胞生物並にぼんぼんと人間を

産めるこの時代ですら根強く残っている。

大体、男女の一对で同衾し懐妊するという事はもはや人類の生産という点では非効率的なのだ。それだったら二人の人格を混ぜ合わせて、新しい人格を子として認知すれば良いのだから。それは色濃く両親を受け継いだ、紛れもない実の子である。大切なのは物理的な血の濃さではなく、両親の性格を継承する事なのだ。思想、性格、癖、体質。これらが継承出来れば良いのであって、そこに性別は関係ないのだ。それを表面上理解している人は多数いる。しかしその腹の中を軽く突つくと、出るのはやはり、男女の一对こそ健全、という思想なのであった。

そういう時勢に、次姉は次姉の信念を貫き通している。次姉の恋人は、次姉のコピーから産まれた人間である。ある意味、自分に自分が惚れたような形である。しかし次姉は、それを恥じる事はなかった。むしろそれを誇らしく思っているフシもある。そこに到るまでは数多くの葛藤があったに違いない。次姉はそれを乗り越えたからこそ今があるのだ。

次姉は立派だ。私もそれくらいずっと構えた人間でありたいと思う。

□

長姉は何かにつけて私を「不潔」呼ばわりしてきた。これは言葉が不適切で、適切な言葉に置き換えるとすれば「不倫」がもっとも近いかもしれない。私が不倫をしているわけではない。そもそも私には配偶者や恋人がいないのだから。

私には片思いの相手がいって、その恋が実するという事は、すなわち、相手に不倫を強要する……という事なのである。私の想い人は結婚して旦那さんがいる、普通の人間なのだ。

あなたは他人の家庭を壊すつもりなの？ と長姉は問うているのである。もちろん壊す気など毛頭ない。私は、想い人の旦那さんにも面識があって、夫婦で一つと行って良い程仲睦まじい事を知っている。一つのを切り裂いてでも事を成し遂げるなど、私には出来ない。

……人生二つ目の大きな矛盾だ。あまりにも大きくて、私は途方に暮れるしかなかった。

□

努めて教会に通うのは、妥協のようなものだ。私は綾さんに会う機会がとにかく欲しいのである。

綾さんが私に振り向かない事は十分に承知しているつもりだ。旦那さんがいる、同性愛者ではない、歳も……精神的な話である。製造年月日で換算するような無粋な事はしない方がいい……離れている。

間違いなく、綾さんと旦那さんは二人で一つの夫婦で、そうある事が自然で、穏和であった。そのような関係性を持っているところもまた、魅力的に見えてしまう。

諦めが悪い。そう、私はそういう性質なのだろう。あわよくば隙を見つけて綾さんの唇を奪おう、というような盗賊意識はない。ただ一緒にいるだけで私はそれでいいのだ。実ってはいけない恋だから、追い求めようとするのだろう。随分と苦く甘いものを知ってしまったものだ。

馬鹿だな、私は。

▷

その日は雨が降り止み、雲の合間から太陽がちらちらと顔を出していた。じわじわと湿気をおびた暑さが、夏の到来を感じさせる。

私は周囲に誰もいない事をいい事に、手荷物になった傘を刀代りに振り回していた。細くて長いものを握ると、なんだか武器を持っている気分になる。

私は近くの街路樹に生えているつつじを相手に、抜刀してみたり、辻斬りしたりしていた。つつじは中々と頑丈で、時に傘が持っていかれて抜きとるのに苦労した。つつじの中で雨宿りしたまま眠ってしまった猫に傘が当たってしまい、戦闘状態に移行したりもした。

私は猫と死闘を繰り広げながら、教会をのろのろと目指した。

□

私が顔や腕に生傷を作りながら猫を従えて来たものだから、綾さんは大いに驚いた。綾さんが救急箱を取りに行っている間に、私は猫を抱き上げてパイプ椅子に乗せてやった。すると猫は先程の戦闘力を爪の先程も見せずに、ただのんびりと丸くなった。

少し太った猫である。灰色で、顔には貫禄がある。撫でてみると予想以上に手が沈む。首元をくすぐってやるとなあなあと鳴いて可愛い。

私はこの猫に名前をつけてやる事にした。手始めにタマ、と呼んでみる。反応はない。ジジ、と呼んでみる。反応はない。ミリー、と呼んでみる。反応はない。

最後にクロ、と呼んでみる。すると、猫はこちらを向いて、何か用でもあるのか、と言いたげな視線を向けてくる。

「ああ、クロっていうの」

クロは、なーと鳴いて首肯した。

□

今日の綾さんは夏場相応の薄着だった。

綾さんに傷の手当をされながら、クロとの事の経緯を話した。私の体は機械なのだから、傷の手当てなど不要ですよ、という合理的説明はあえてしなかった。

顔の生傷を手当てされる時に見える胸の谷間や、少し透けて見えるブラを、私は可能な限り、努力出来る範疇で目線の外に追いやった。

腕を手当てしてもらう時には、私はパイプ椅子に腰かけ、綾さんは屈んでいた。さらに胸が見えやすかったのは言うまでもない事である。

私は無駄な努力を諦めた。目線は自然に落ち着くところへ流れるようにした。胸に目線がいくのは、男として、いや紳士として正しいあり方ではなかろうか。きっとそうだ。きっとそうだ。

「やっぱり男の子なのねえ」

綾さんは私を見ながらにやにやとしている。ああ。そういう事って、やはり見られる側からすると簡単に見抜けるのだろう。

「……失礼しました」

「いーのいーの。でも、そんなだと彼女が出来ないわよ」

綾さんは救急箱を閉じ、クロの耳を撫でた。クロは気持ち良さそうにしている。

私は複雑な気持ちを飲み込んで、綾さんとクロを見ていた。

▷

教会にいる間は心穏やかである。

今日も私と綾さんの二人で、黙々と本を読んだ。綾さんは週刊誌を、私は「吾輩は猫である」を読んだ。

餅が口について離れなくなり、よたよたと後ろ足で立って踊る猫……なんだか不思議だな。

……不思議だな。猫の事ではない。雰囲気の話である。いつもの教会なら、なんとというか、穏やかさ、清々しさ……もっと好い空気というものがあった。ところが今日はそれがない。教会は重く、暗く、昼間だというのにここだけ夜がまだ明けてないような、そんな感触があった。見た目はいつも通りで、部屋は狭く、パイプ椅子が綺麗に整列され、教壇があり、天井の隅にはセンサーがある。

私はセンサーを見るフリをしながら、目の隅で綾さんを捉えた。綾さんも、やはりいつもと変わらない。しかし決定的に何かが違った。この教会独特の雰囲気というものは、教会自身に備わっているわけではないのだ。綾さんの心持ちが、この教会を決めているのだ。

私は、恐る恐る綾さんに聞いてみる事にした。

「あの……」

「なに？」

「何かあったんですか？」

……何かあったんですか？ とはまたえらく直球な言い方だ。言った直後に反省した。もう少し、語彙を駆使してクッションを入れた言葉を考えてから喋るべきだった。

綾さんは週刊誌に視線を落としたまま、言おうか、やめようか、と迷っていたようだった。左肩に結っている髪を撫でながら、喉元まで出かかっている言葉を、無理やりに飲み込んでいるようにも見えた。私は綾さんの言葉を待った。

しばらくして、綾さんは肩を落として、はぁ、と溜息をついた。顔は無表情から、困ったような顔になっている。

「それがねえ……」

綾さんは少しずつ、憂鬱な話を私に話してくれた。

□

教会を後にした。今日は霧のない、良い天気であった。

私は話を聞いた後、何も答える事が出来なかった。言葉が出てこなかったというのもある。私の心が、今までとは違う変化を持ったからというのもある。

私の心の中では猛烈な戦争が繰り広げられ、一つの論点では天使が勝ち、一つの趣旨では悪魔が領土を占有した。未占拠の土地はまだまだ数多く残っているように思われた。私は考え続けた。

考える限り、終戦はない。お互い正義だと思ってやっているのだから、対立するのは仕方ない。天使としては最大の悲劇なのだ。しかし悪魔にはこれ以上とないチャンスなのであった。私は、帰り道の道端で頭をかきむしった。近くの自販機でコーラを買い、ぐいぐいと飲み干した。考え過ぎて頭痛がする。吐き気もする。人生始まって最大級の気持ちの悪さだ。

そんな事があってたまるものか、しかしこれを逃す手はない……いや、駄目だ、駄目な事が駄目だ、ああ、もう！

私はコーラの空き缶を、適当な方角に思いきり投擲してやった。そうすると、缶は良い音を立てて散歩中の長姉の頭に直撃した。

「……」

悶絶する長姉を、私はただ呆然と見ていた。姉さん、何故そこにいるんですか。

□

長姉の激昂に任せた怒声には、流石の私のお小言スルースキルも通用しなかった。なんせ私が悪いのは確かなのだから。

「いくら私がコーラが好きだと言っても、空き缶を投げつけられて喜ぶ程ではありません」
長姉は怒ると敬語を使う。一通り敬語が続いた後で、落ち着いた長姉は私をじろじろと観察していた。

「何があったの」

何もないよ、と私は言った。

長姉は疑い深く私を見た後、そう、と一言だけ返した。それきり、長姉は帰路の間、黙り続けた。

□

綾さんの旦那さんは、死について納得のいく人物であった。そして、旦那さんには余命がいくばくもない、という事を綾さんから聞いたのであった。

私は綾さんと旦那さんこそ世界一の夫婦であると思っていた。それが今、旦那さんの死生観によって仲違いをしているようなのである。

難病らしく、余命はもう数ヶ月である聞いた。綾さんは、なんとしても旦那さんには死んで欲しくなかった。体を変えないか、と何度も説得したのだという。しかし旦那さんはそれをかたくなに拒んだ。自殺願望とは違う、理解出来ない何かを旦那さんは考えている……のだろう。私には理解し難い。綾さんもそれは同じだろう。どうして死ぬと分かってそれ程までに平静でいられるのだろうか。

なにせよそれは悲劇である。私は綾さんの泣く顔など見たくもない。

同時に、それは私の恋が実るとてつもないチャンスとも捉えられる。もしかすればこれを境に綾さんにもっと近づいて、その唇を奪うなんて事も堂々と出来るのでないか、と。……なんて酷い考えだろう。人の死に便乗するような浅ましい、愚かな、下衆で、最低なやり方だ。でも、しかし……。

良心たる天使はこう囁く。私も一緒に旦那さんを説得して、体を乗り換えてでも生きて欲しいと。世界一の一对であり続けて欲しいと。

悪意の塊たる悪魔はこう囁く。その死生観を理解したフリをして、綾さんを説得し、死後に綾さんを口説けと。私が世界一の一对になれと。

私は考えた。天使は人として正しい。しかし悪魔は魅力的だ。

どうすればいいんだ。あなたならどうするだろうか。私は天使たるべきか、悪魔たるべきか……。

□

教会は開いていない日が多くなった。

私は飢えた。綾さんに会えないという事はこれ以上とない苦痛であった。

開いているときに綾さんに会うと、苦痛こそ消えるものの、今度は悲痛が私の中を占拠した。

綾さんは神にひたすら祈り続けた。いくらか痩せ、顔は沈痛であり、教会の雰囲気は日を追うごとに暗い深海に沈んでいっているようであった。

「旦那さんは……」

「よくないね」

「やはり、体を変えようとなさらないのですか」

「うん……どうしても譲らないの。毎日言っても、『いいんだ』って……」

綾さんの言葉には嗚咽が少しばかり混ざっていた。

私は震えた。私には綾さんの顔を直視出来なかった。直視したら、目に溜めた涙を悟られそうだったから……。

「アオノくんは、なんで進んで死のうとするのか分かる？」

「分かりません……分かりたくも、ありません」

私もそう思う、と綾さんは返した。

「アオノくんは優しいのね。あの人の為に一緒に泣いてくれるのね」

綾さんは私の頭を撫でた。

違うんだ。私は、綾さんが泣いている事に心を痛めているんだ。旦那さんの事よりもそっちの方が大事なんだ。

「ねえ、あの人になんて言ったらいいと思う？」

私は仮に、自分が旦那さんの立場にたってみた。私なら、綾さんが泣いているところなんて見たくない。綾さんが懇願するのを無視するなんて考えられない。きっと綾さんの為なら、延命なんて二つ返事でやるだろう。

……いや。私と同じで、旦那さんもそんな心持ちなのではないだろうか。もしそうで、それでも我を通したいと思うなら……。

「いつも通りの、素敵な綾さんとして接したらいいと思います」

そうだ、たぶん、そうなんだ。死ぬ時こそ、最後まで魅力的な綾さんでいて欲しいんだ。

「ぼくには旦那さんの心境は分かりません……でも、やはり、最後の時まで、笑顔で、素敵な綾

さんを見ていたいと思うのではないのでしょうか。旦那さんが考えを改める事がないのなら、最後に悔いなしと言えるような、幸せを持たせて見送るべきなのではないのでしょうか」

「……」

綾さんはじっと私を見つめた。私も綾さんから視線を逸らす事はなかった。

「……そうね。そうかもしれないね」

……私は悪魔を選んだように思える。しかし、旦那さんが考えを変えない以上、そう答える事が正しいように思われた。決して綾さんを振り向かせようとして口にしたわけではない。あくまで、死を選ぶという事とは何かを想像した結果を言ったまでである。

綾さんは少しばかり憂いがとれたように見えた。

「もうあの人に死なないで、と言うのはやめるわ。アオノくんの言う通りね。最後まで、悔いのないにしてあげないといけないね」

綾さんは髪留めを解いて、ポニーテールを作った。

「今日は帰るよ。そうと決めたらあの人ともっと一緒にいないとね」

□

その日の帰りは急に霧が濃くなり、数メートル先も見えなかった。雨がっぱもなく、私は濡れながら、記憶を頼りに道を歩いた。頬につく水が不愉快だ。水分を含んだ服が、肌に貼りついて気持ちが悪い。

音はない。しんとしていて、自分の足音までも霧が飲み込んでるように思われた。時より車のライトや、家の明かりがぼんやりと見える。それ以外は薄い灰色ばかりである。

私は正しい事を言えたのだろうか。あれ以外にも、もっと良い事が、言えたのではなからうか。

そう思うと、なんだか取り返しのつかない発言だったように思える。

遠くから救急車の音が聞こえる。それはだんだんと近づいてきて、赤い光を霧に含ませながら道路を通り過ぎた。

▷

私は葬式から帰ってきた。

長姉はその時ばかりは不潔呼ばわりはしなかった。

次姉が家に帰ってきて、慰めの言葉をくれた。

三姉と一緒に泣いてくれた。

葬式には母も参加した。母は何も言わなかった。母は、この時涙も見せず、ただ無表情で葬式に参加していた。説教を聞き、賛美歌を歌い、祈り、棺に花を添えた。そして死者の親族へ哀悼の意を述べた。

火葬場へ行く綾さんを見ながら、母は何を思ったのか。高校の頃からの長い付き合いで、帰郷する前に住んでいた街でも、綾さんと母は近所だったという。その友情は、決して安いものではなかつたらう。

私は……何の感慨もなく、空っぽの頭で葬儀の場にいた。そして姉達が家で迎えてくれた時に、

始めて、涙が溢れた。

□

今日も教会に来た。私は奥にある小部屋に入って、雑事をしたり、聖書を読んだりして過ごした。私は今、シスターとして勉強中である。修道服を着て、誰もいない教会で一人祈っている。あの日、綾さんは車に轢かれて亡くなった。我が街では、濃霧のせいで交通事故がとても多い。あの時通り過ぎた救急車は、綾さんの為に出動したものだだったのだ。

旦那さんは、その後、体を替えて生きながらえている。綾さんの分まで生きる、という、ありきたりな、しかしよく分かる理由を私に話してくれた。

長姉はあれ以来、私を不潔とは言わなくなった。それは論理的に不潔でなくなったから、というのもあるだろうが、綾さんが亡くなった事に対する私への配慮でもあるのだと思う。

母はまた旅行へ出かけた。しばらく一人にさせて欲しい、とつぶやくように言って、どこかへと行ってしまった。

私は、葬儀以来、どこか心が欠けたような心持ちだった。あれ程葛藤していた日々も、遠い遠い昔の話のように思える。あれ程焦がれた想いも、あの日の霧の中に置いてきてしまったような感じがする。

小部屋を出てパイプ椅子に座った。こうしていると、ふとした弾みで綾さんが話しかけてくるのではないかと.....そんなありもしない事に密やかに期待してしまうのである。

禁欲的生活とは程遠いし、俗世を離れているわけでもない。それは綾さんだって同じだった。私はウィンプルを脱いで、伸びた髪を結った。まとめた髪を左肩に置いて、ぼんやりと天井を見上げた。

男が修道女の格好をするなんておかしいと思う。結局私は、憧れた人のように振舞おうとしている。何故そうするのか分からない。未練なのだろうか。たぶんそうだろう。

女々しい奴だな、ぼくは。

「祈りましょう」

私は誰にも宛てずに言った。

その声は天井のセンサーに記録されて、誰とも知れぬ人達に知覚された。